

南足柄市立岩原小学校

研究テーマ：「考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成」

～聞く力・話す力を育てる指導の工夫改善～

1、実践の目的

本校では近年、研究テーマを「進んで学び合う子の育成」とし、国語科と算数科の授業実践を通して研究を進めてきた。しかし、児童の中には、自分の言葉で相手に伝わるように丁寧に話をしたり、自分の考えと比べながら聞いたりすることが苦手な児童も多い。また、全国学力・学習状況調査の結果からは、「目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように書き表す力」や「問題解決の方法を考えたり、式の意味を読み取ったり、式変形をしたりした思考の過程を他の人に説明する力」に課題が見られた。

こうした背景から、「思考力・判断力・表現力等の育成を図るための授業の工夫・改善」に向けて、「考えを伝え合い、学びを深め合う児童の育成」を新たな研究テーマとした。また、「伝え合う力」を育成するためには、互いの立場や考えを尊重し、よりよい人間関係を作り、「聞くこと・話すこと」を中心とした研究が必要であると考え、サブテーマを「聞く力・話す力を育てる指導の工夫改善」とし、「主体的・対話的で深い学び」を実現した児童の姿が、より明確に見えるような授業づくりをめざしていくこととした。

2、実践の内容

(1)「聞く」「話す」の指導の充実

「聞く」「話す」「話し合う」といった基本的な技能を身につけ、他者との話し合いの

中で、考えを練り合うことをめざした。児童自身の言葉で考え、伝え合い、納得し合い、理解し合っていくことで、自分とは違った考え方やものの見方があることを知り、お互いの立場や考え方を尊重し合うようになっていくと考えた。そのために以下の方策について、低・中・高学年部会別に協議を重ね、めざす児童の姿を具体的にイメージし、共有を図った。

- ・めざす姿の共通理解（伝え合うためのステップアップシート）
- ・聞き方・話し方の技能を身に付けさせるための掲示資料の工夫
- ・授業グランドデザインの作成

【聞き方・話し方の指導の共通理解】

【聞き方の指導】 あたたかい聞き方をめざして
※受け止める力の育成 → 「人の意見を正確に理解する力」の育成

○話す人に、目・耳・心を向ける。

○「～さんの言いたいことは何かな？」と考えながら聴く。

○考えながら、あたたかく反応し、うなずきながら聴く。

「うんうん。」「へえ～。」「そっかあ！」「う～ん。」

「なるほど！」「わかった！」「いいと思います。」「同じです！」

「おいしい！」「質問です。」（「他の考え方があります。」）

※全員で同じ反応ではなく、自分なりの自然な反応の仕方を大切に。

○話している人の考えが「わかるのか」「わからないのか」自分の立場をはっきりさせながら聴く。

わかるとき → 意見をつなげる言葉を考えて自分の言葉でも話す（話し方参照）

わからないとき → 「少し難しいです。」「まだ、よくわかりません。」

「もう少し詳しく教えてください。」「もう一度説明してください。」

※わからないことをそのままにせず、「わからない」と言えることが大切。

どこまではわかるのか、何がわからないのかを明確にして反応をする。

○自分とは違う考え方を大切に、友達の見聞を励ましたり助けたりする意識をもつ。

**【話し方の指導】 わかりやすく話すために
※発信する力 → 「自分の考えを的確に表現する力」**

○教師ではなく、友達に向かって話をする。

「聞いてください。」「話してもいいですか。」

「私は～だと思うけど、みんなはどうですか？どう思いますか？」

○順序立ててわかりやすく話す。相手に伝わるように話す。

「まず・・・次に・・・最後に・・・。」「～だと思います。なぜかという～。」

○「わからない」「こまった」を大切にす。「わからない」ことからスタートする。

「～まではわかるけど、その後がわかりません。」「だれか、続きを説明してくださいませんか。」

○友達の反応を確かめながら話す。みんなに伝わるように短く切って話す。

「～ですよ？」「ここまで、いいですか。」「ここまでは、わかりますか？」「どうですか？」

○友達の考えにつなげて話す。友達の考えを広げたり深めたりする。

「～さんに付け足しです。」「～さんと似ています。」「自分の言葉で言う～。」

「詳しく言う～。」「言いたいことは、つまり～。」「～さんの考えとは、少し違って～。」

○共通点や相違点を見出し、多様な考え方をまとめていく。(多様な考え方が出てきた後に)

「今出てきた考えをまとめていく～。」「これらの考えに共通する(違う)ことは～。」

「今日のめあてに対するまとめは、つまり～。」

(2) 「問い」を大切にしたい授業づくり

「問い」は、問題解決を子ども自身が主体的に進める上で必要なものであり、既習事項を活用すれば解ける、自ら調べたくなる、考えたくなるような「問い」であれば、話し合い活動も子ども同士で取り組むことができると考えた。

そのため、教師が教材研究を深く行い、児童の状況を把握して既習事項を見極め、目標を達成できるような「問い」を提示することを大切にしてきた。その際、教師は説明を控え、児童の考えを支え、促す発問や指示をすることも重要である。「どうする・どうして・なぜ・わけは・だから・どういうこと・どうしたらよい」と疑問を投げかけ、児童の発言を待つようにした。

(3) 系統的なノート指導の充実

ノート指導においては、学年の系統性を意識して、段階的な指導をしていくことが重要であると考え、低学年ではまず、学習過程に沿ったノートの書き方の形式やルールを身に付けさせている。中学年では、自力解決の場面で自分の考えに絵や図等に基づいた根拠をもたせることや、その後の交流の場面で、それらを用いて友達に説明させる

ことに重点を置いて指導している。そして、高学年で自力解決の場面での考え方や表現の仕方が多様になってくると、個々のノートの記述を基に授業の中でどのように高め合ったりしていくのかについて指導の重点を移していく。

さらに、友達との学び合いの中で得た考えや、学習のまとめをノートに書き記し、後で既習事項として活用できるようなノートづくりへと系統的に指導を進めている。

3、実践の成果

日々の授業の中で、「聞く・話す」ことを常に意識したり、話し合いにおける聞き方や話し方などの技能を身に付ける取り組みを充実させたりすることにより、その技能を生かして自分なりの考えを伝えることができるようになってきた。

また、身に付けた技能を生かして自分なりの考えを伝えたり、多様な交流を通して仲間と学び合ったりすることにより、伝え合うことの喜びや楽しさを感じることができるようになり、伝え合うことへの意欲が高まってきた児童もいる。

さらに、系統的なノート指導を行ってきた成果もあり、自分なりの考えをノートにわかりやすく整理したり、それを基に友達に考えを説明したりすることができる児童が増えてきた。

4、今後の展開

児童の思考を促すための発問や問い返しの発問をすること、考えをまとめる時間を確保することなどに課題が見られた。

今後も、単に「聞くこと、話すこと」の形式的な指導にとどまらず、「伝え合う」ということの意味や価値、必然性を実感させられるような指導をしていきたい。